

豊かな人間関係を育む学校づくり

- 心の冒険教育の普及と導入 -

南国市立香南中学校 教諭 森 浩二

本研究では、心の冒険教育を県内に普及させていくうえでの手立てを示すため、先進県の取組に学ぶことや実際に子どもたち、教職員及び保護者の活動を支援すること、さらに米国での実践校視察を行った。この結果、研修講座受講者へのフォローアップや指導者研究会受講者を初級、中級の研修講座や校内研究会の講師に派遣することがより重要になることが分かってきた。また、活動事例集等を作成し、情報の共有化を進めることにしている。さらに、ホームページの活用により、多くの教職員への普及につなげたい。

今後の課題は、各地域で拠点になる人材づくりと実践校へのサポート体制づくりである。

キーワード：「心の冒険教育」「人間関係づくり」「普及」「フォローアップ」

「プロジェクトアドベンチャー」

1 はじめに

文部科学省が出した「生徒指導上の諸問題の現状」にもあるとおり、不登校数は減少しているが、暴力行為・いじめの増加など、高知県の子どもたちは今、厳しい状況にある。また、同じく同省の「児童生徒の問題行動対策重点プログラム」では、命を大切にす教育の充実の中で「伝え合う力と望ましい人間関係の指導の推進」を挙げており、「学校の各教科等の指導や生徒指導上の効果的なプログラムを生かし、自分の気持ちや考えを適切に相手に伝え、生活上の諸問題を言葉で解決する力の育成を図るとともに、互いに尊重し合い望ましい人間関係を構築するための指導を推進すること」の必要性や、「社会性を育む体験活動の充実」の中で「他人を思いやる心を育むことを目的とした体験活動」の重要性を唱えている。

一昨年度、宮地主事との心の冒険教育の導入に関する共同研究により、この活動を通して人間関係の高まりについて効果があることが分かった。更に子どもたちや教職員をはじめとする多くの方々にこの手法を紹介し、考え方について理解してもらうとともに、活用に結びつけていきたいと考えた。この手法は、楽しさ・気づき・安全に留意し、子どもたちが心も体も安心した環境づくりを実現していくなかで、人間関係を育み、信頼関係の構築を目指している。そこで、高知県の状況に合った導入方法の提示をすべく、研究を進めることとした。

2 研究方法

研修

県内外の講座を受講 - P A J 主催・心の教育センター主催・アドベンチャー教育指導者講習会
先進県訪問 - P A J スタッフに同行し、宮城県・山口県・兵庫県・福島県・神奈川県へ
米国実践校訪問 - ミニットマン職業訓練高校・ウェアリングスクール・ローエンバーグ中学校

実践

ファシリテーターとして、県内各学校や少年鑑別所、P T A 研修等で約 50 回の活動を支援
わくわく心の冒険教育児童生徒体験会 - P A J スタッフによるスーパーバイズ
事例集・Web ページ（パンフレット）の作成

交流

県内各地の実践者や組織 - 心の冒険教育交流会・自主研究会・グループカウンセリング研究会
各県の実践者や組織 - M A P (Miyagi Adventure Program)、H A P (Hyogo Adventure

Project) A F P Y (Adventure Friendship Program in Yamaguchi) 『教育改革と体験学習法全国ミーティング』(宮城県花山少年自然の家で開催)
インターネット - 掲示板の活用により全国の実践者との情報交換

3 研究内容

研修

各講座から次のことを学んだ。

- ア 仲間が支え認めてくれる環境が子どもたちの成長を促していく。
- イ 「コンフォート(安心)ゾーン」をつくることと併せて、子どもたちが「学びたい瞬間」を創り出すことが重要である。
- ウ 個人や集団の状態を見取ることができるファシリテーター(支援者)としての感性を磨くことが必要である。
先進県の訪問から次のことを学んだ。
 - ア 宮城県では、学校不適應問題についてその予兆をとらえ、問題を未然に防ぐ対策の一つとして、全国に先駆けて平成12年度より「みやぎアドベンチャープログラム(MAP)事業」として全庁をあげて取組を進めている。現在では5000名以上の教職員が講習会を受講し、全教職員の約20%が実践し、県内約7割の学校で教育活動に取り入れている。
 - イ 山口県では、1988年に米国でのOBS(アウトワードバウンズスクール)への研修を始まりとして、1990年からは野外教育指導者講習会、1993年からは青少年自然体験活動推進事業が行われ、「野外教育」を子どもたちの成長の大きな要素として捉えている。その実績の上に2001年からPAを学校での教育プログラムとして取り入れている。
 - ウ 兵庫県にPAの手法が導入されて2年目である。兵庫県では、古くより小学校・中学校での野外宿泊研修が実践されており、特にすべての小学5年生に対して4泊5日の体験が行われている。その活動の中にPAのプログラムが取り入れられている。また教職員研修や兵庫教育大学の学生対象にも講座が開かれている。
 - エ 福島県では実践校での取組の中で、それぞれの子どもの課題に応じた活動内容を設定することが重要であること、また、アンケートの実施の結果から数値的にも活動の効果が得られたこと(特に不登校経験者についての数値測定)がわかった。実践校と県との協力体制もできつつある。
 - オ 神奈川県では、女子体育連盟と学校体育研究連合会が4年前より体育実技講習会などで研修が進められてきたが、この手法を幅広い校種の教職員が体験し、「体育」の教科だけでなく、特別活動等の学習の中で取り入れている。また、体育連盟が活動母体となり普及を図っており、私立中学校・高等学校にも広がりが見られている。

米国での実践校訪問

- ア ミニットマン職業訓練広域高校はボストン校外の公立高校で、学校内に美容室・保育室・レストラン・建築事務所・自動車工場等様々なショップがあり、生徒たちはそこで実際に働きながら学習を進めている。生徒にはそれぞれ「学びのスタイル」の違いがあり、それぞれの生徒にあった学びを教師がプログラムし、生徒がどう学ぶかを支援している。
- イ ウェアリングスクールは10才から17才の子どもたちが学ぶプライベート(私立)スクールで、プロジェクトアドベンチャーの考え方を授業に生かし、「言葉」に意識しながらコミュニケーションを取り、振り返りの中でお互いの違いを認めあい、楽しみながら問題解決能力を高める環境を創り出している。
- ウ ローエンバーグ中学校は環境的(経済的にも)に厳しい地域の公立中学校で、プロジェクトアドベンチャーの手法を導入し学校を立て直した実績がある。ルールを大切にしながら、「読む」

「聞く」「書く」ことの徹底を図り、すべての教科の中で「言葉」と「感情」を結びつけ、学校の中にボキャブラリーをあふれさせている。

実践

各学校でファシリテーター（支援者）として多くの経験を積むことができた。小学校では江陽小学校、吾桑小学校、大篠小学校、三原小学校、中学校では香長中学校、香南中学校、戸波中学校、鏡中学校、高等学校では太平洋学園高等学校、室戸高等学校、須崎高等学校、中芸高等学校、城山高等学校、嶺北高等学校、須崎高等学校久礼分校、高知北高等学校、大柘高等学校、施設として少年鑑別所、各少年自然の家、その他、PTA研修や教育研究会での教職員研修など、自分自身がファシリテーターとして様々なグループにかかわることができた。

その中で、それぞれのグループによる状況の違いを実感し、それぞれの対象者の集団に応じた活動の組み方、声のかけ方、進め方などについて学ぶことができた。

取組の例として次の2つのケースを紹介する。

ア 三原村の取組

三原小学校と三原中学校の児童生徒による交流的な学習。小学校3年生と4年生のグループ、小学校5年生と中学校1年生のグループ、小学校6年生と中学校2年生のグループでそれぞれ活動を行った。1度だけの活動であったが少しずつ緊張もほぐれ、自然にかかわり合いを持てる活動ができ、学年・学校を越えた新しい試みとして今後の異学年の交流へとつなげるものとなった。

イ 城山高等学校の取組

1年生全員に対して、1学期に1回ごとの実施。最初は2～3人のグループづくりを中心に、少しずつ集団を広げていった。3回目には、教育センター分館でのエレメント（器具）を使った活動を行った。男女の壁を越えて協力しあう場面も見られ、活動後のアンケートでも達成感とともに協力する喜び・楽しさが見られた。1回限りの活動では得難い効果があると思われる。

「わくわく心の冒険教育児童生徒体験会」の取組

研修講座を受講した人が子どもたちに授業をし、その様子をプロジェクトアドベンチャージャパンのスタッフにスーパーバイズをもらい、スキルアップを図った。

その振り返りの中で特に、「子どもたちの様子はどうか、環境はどうか、体験に対しての準備はできているのか」「何が起きているのか、体の全てのセンサーを使って感じ取ること」等、心の冒険教育に欠かせない「学びの環境づくり」への配慮を十分に行うことを実感した。「何が見えるか、何が聞こえるか」をしっかりと感じ取り、目の前の子どもたちの状況を正確につかむことの重要性を学んだ。

心の冒険教育について多くの教職員に理解を広めるために、インターネット上のWebページとしてアップできるように準備を進めている。また、様々なプログラムを事例集としてまとめている。

交流

「心の冒険教育交流会」は高知県教育センター分館体育館で土曜日に年4回開催され、初めて体験する人を中心に交流を深めた。また、「自主研究会」として毎月1回、主に介良潮見台小学校を会場として県内の実践者が集い、実践交流・情報交換を進めている。更に、今年度、中村市教育研究会の教科外部会として「グループカウンセリング研究会」が発足し、各学期に1回の研究授業を実施している。

各県

ア 宮城県のMAP（Miyagi Adventure Program）・みやぎアドベンチャープログラム研究会とは、インターネット上のホームページを相互リンクし、また実際に毎月1度開かれている研修会にも参加することができた。

イ 兵庫県のH A P (Hyogo Adventure Project)へは、活動の核となる施設を訪問する機会を得て、施設のエレメント(器具)を使った活動も体験することができた。

ウ 山口県のa f p y (Adventure Friendship Program in Yamaguchi)とは、支部単位での交流が続いており、活動している施設の一つを訪問することができた。

エ 宮城県花山少年自然の家で開催された『教育改革と体験学習法全国ミーティング』に参加し、「生きる力」や「確かな学力」を育成していく上で必要とされる「良好な人間関係づくり」や「子どもたちの主体的な学びの展開」に効果がある体験学習法についてワークショップ形式で研究協議を行った。自主発表として、高知県の取組を情報発信する機会を得て、特に全国初とも言うべき管理職対象の「風通しのよい職場づくり研修」や少年鑑別所での実践など、先進的な取組として注目された。

インターネット上の交流として、個人のホームページにP Aに関する掲示板を設置し、全国の実践者との交流を深めることができ、これをきっかけとしての新たなつながりや情報交換へと発展していった。ただし、その場の雰囲気等を共有することができないため、細かなニュアンスを伝えるには限界がある。

4 結果と考察

結果

研究を進める中で次の結果を得た。

各県指導者養成システムやその活用には違いがある。(独自のシステムがある。)

単に活動するだけでは、子どもたちの行動の変化までには至らない。

学校にはそれぞれの課題があり、ニーズを的確に把握するように努めている。

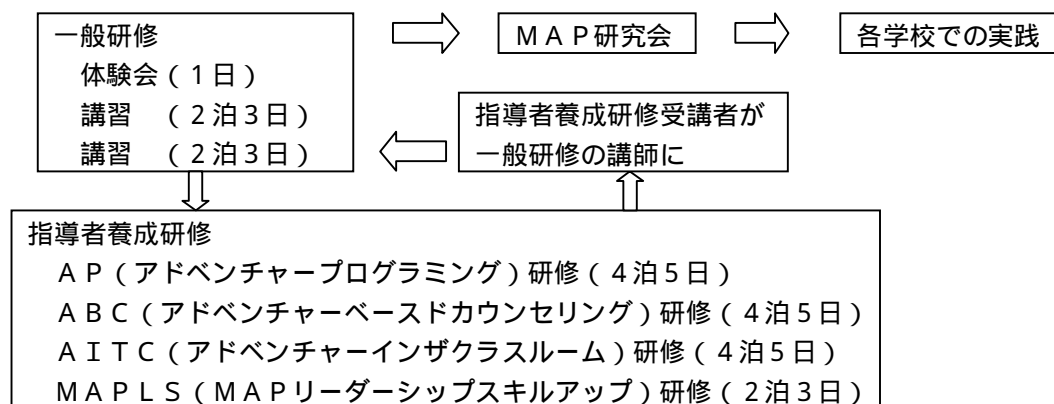
W e b上のネットワーク活用による交流や情報交換の効果と限界。

考察

以上の結果から、次の4点が考察される。

宮城県の普及システムは、県とM A P研の共同として実践しており本県にも参考になる。

宮城県では、みやぎアドベンチャープログラムの研修体系として、一般研修と指導者養成研修に大きく2つに分かれている。一般研修には1日の体験会、講習、講習がある。1日の体験会を受講した人が講習(2泊3日)さらに講習(2泊3日)を受講する。指導者養成研修には、下記のような4泊5日等の研修があり、一般研修を受講した人が指導者養成研修に進む。宮城県では指導者養成研修を受講した人が一般研修の講師として活動する、ここに大きな特徴がある。つまり、指導者としてスキルアップを図るとともに、初めて参加される人への普及を図ることをシステムとして行っているところに特徴がある。また、いずれかの研修を受けた方がM A P研究会に入り、メンバーとして自主研修を重ねながら各学校での実践につなげている。



心の冒険教育の活動をすることが目的になってはならない。あくまでも「人間を育てる」という、人間づくりの視点がより重要である。

心の冒険教育の活動をすることが目的ではなく、あくまでも「人間を育てる」という人間づくりの視点がより重要である。人間関係が希薄だからこの手法を導入するのではなく、あくまでも、教科や特別活動、総合的な学習など、それぞれのねらいを達成していく上での一つの手立てである。その前提に立って、心の冒険教育の「考え方」を活用し、子どもたちが「授業が楽しい、分かる、おもしろい」と感じるような授業づくりを行いたい。このことが、人間づくり・学校づくりになると考える。

学校支援の際には、子どもたちへの支援と併せて、教職員への研修の場を設定することが必要である。

子どもたちへの支援だけでなく、その前後に、教職員に体験してもらうことを通して、手法や考え方についての理解を深め、教職員による子どもたちへの支援とつなげることが重要である。嶺北高校では教職員による子どもたちへの支援までには至っていないが、年間5回の取組全てに教職員の研修も組み込んできた。また城山高校では、教科・福祉の担当者が授業にこの手法を取り入れて、対人援助として地域の高齢者や保育所の子どもたちへの実際的なかわりにつなげるまでに高めている。



教職員の研修の場

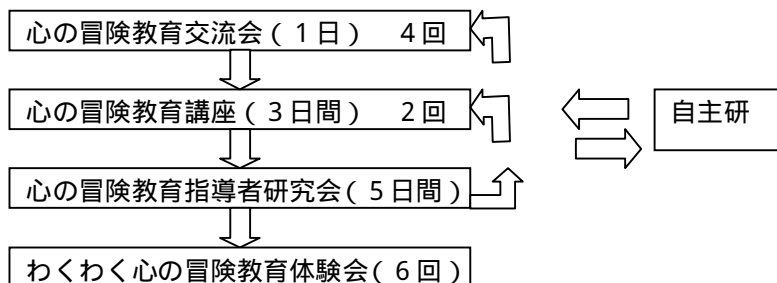


ファシリテーター（支援者）として

研修講座を受講した教職員へのフォローアップが、学級や学校での実践をより具体化することにつながる。また、指導者としてのスキルアップを図る上で、受講者を校内研修会や研修講座、子ども会やPTA活動での講師として派遣依頼することが重要である。

今年度の心の冒険教育推進事業として、1日の心の冒険教育交流会を年に4回、3日間連続の心の冒険教育講座を2回、この3日間の講座の受講者が参加する5日間連続の心の冒険教育指導者研究会へとレベルに応じた講座が実施されている。これらの講座受講者が、この手法を使ってどのように授業づくりを行っていくかをプロジェクトアドベンチャー・ジャパンから講師を招いて協議していく「わくわく心の冒険教育体験会」も6回実施している。宮城県を参考に、上級コースの受講者が初級・中級コースの指導をしていく研修システムや、自主研のメンバーも講座の講師として活躍できる場の設定も今後必要になると考える。

【心の冒険教育推進事業研修体系】



5 まとめ

成果

今年度、1年間でのべ50回、約1600人にのぼる子どもたち、教職員、保護者へファシリテーターとしてかかわることができた。この数は、これまでの3年間で一番多い。この取組を通して、新しく実践を始める学校や、複数回の実践に取り組む学校が増えてきた。例えば、中村市の後川中学校では、「風通しのよい職場づくり研修」を受講した管理職が、「わくわく心の冒険教育体験会」を校内研究会として実施し、自校での導入を検討したことなどである。また、城山高校では、教科学習への導入や1年生のLHで取組を継続し、学校づくり・人間づくりの取組につなげている。

このように、学校への出前講座（サテライト講座）の実施や受講後のフォローアップを通して、この手法の普及を図るとともに、子どもたちへの支援と教職員への研修を組み合わせることで、心の冒険教育の考え方が広がり、学校づくり・人間づくりにつながっていることは大きな成果である。

さらに、子どもたちの変化も多く見られた。

体験した高校生の感想を紹介する。

「周りの人と一緒に活動するのは難しかった。相手の気持ちと自分の気持ちを合わせるのも難しいけれど、できると楽しいことを実感できた。」

「いろいろな活動を通して、みんなで協力して何かをすることは、自分で考えるより困難なことなんだということを実感しました。でもやっぱり小さなことでもできた時は、うれしくなるものなんだと思いました。あの体験で当たり前のことの中に意外な発見を見つけられたような気がしており、体験できて良かったです。」

「何だか小学生に戻ったみたいで少しわくわくした気分になった。活動の中には探求心をくすぐられ、友人と何だろう何だろうと、楽しく取り組むことができた。風船を2分続けてつく活動では、うまくいくには誰かが必ず手を差し伸べるしかないのではないかと思った。時には後にながたり前に駆け寄り、手を精一杯広げたり、これは人間関係にも似ているのではないかと思った。時には人の助けを借りながら、助け合いながら生きていくこと、私たちの生活は、そうした人の助けで成り立っていると思えた。」

このように、自分への気づきや相手への気づき、さらに、「うれしい」「よかった」「楽しかった」「わくわくした」という感情が表現できていた。こうした子どもたちの気づきや感情面を大切にしていきたい。

今後の課題

今後の課題としては次の2点がある。

県東部・中部・西部にそれぞれ活動の核となる人材の養成と拠点（学校・施設等）を置くこと。

来年度は、各地域に出向いていく講座（サテライト講座）を開くとともに、地域の核となる人材の養成が重要である。

継続して実践する学校へのサポート体制（協力体制）を更に充実させること。

研修受講者が実際に授業づくりを行えるよう、さらにサポート体制を充実させていきたい。そのために、心の教育センター研究生や在籍研究員制度を活用することと併せて、フォローアップできる体制を定着させていくことが重要である。

最後に

この1年間、心の冒険教育特別研究生として、先進県や米国視察に学び、自らがファシリテーターとして心の冒険教育の手法（考え方や活動の仕方）を紹介し、高知県の状況に合った普及と導入（研修システム）について研究してきた。この研究活動を通して、高知の子どもたちの心と体の安全を図り、人間関係を育み、信頼関係の構築を目指すこと、このことは土佐の教育改革第2期の柱の一つである「豊かな人間関係を育む教育の推進」につながると確信している。このような貴重な体験の機会を与えていただき、お世話になったすべての方々に感謝したい。



子どもたちの笑顔のために

6 引用文献・参考文献

- 「児童生徒の問題行動対策重点プログラム」文部科学省 2004
『2003 研究報告「うれしの台」』兵庫県立嬉野台生涯教育センター 2004
『「教えから学びへ」みやぎアドベンチャープログラム指導事例集』宮城県教育委員会 2004
『体験を伴った学び』MAP研究会 2003
『PAを活用した「心の冒険」推進事業の実践』滋賀県立荒神山少年自然の家 2003
『教育改革と体験学習法全国ミーティング報告書』国立花山少年自然の家 2003
宮地暁男、森浩二『平成14年度紀要 第39号 別冊2号』高知県教育センター 2003
本間信哉『刑政5月号「グループワーク、PA＝プロジェクト・アドベンチャー」』矯正協会 2004
梶岩奈々『感じない子ども、こころを扱えない大人』集英社 2001
大河内美以『怒りをコントロールできない子の理解と援助』金子書房 2004
本田恵子『キレやすい子の理解と対応』ほんの森出版 2003
堀公俊『ファシリテーション入門』日本経済新聞社 2004
佐藤学『「学び」から逃走する子どもたち』岩波書店 2004
佐藤学『学力を問い直す』岩波書店 2004
ロン・クラーク『みんなのためのルールブック』草思社 2004